# 第１回まちづくり戦略ワーキンググループ 議事要旨

日時：令和３年11月12日（金）15:00～17:00
場所：県庁４階大会議室・オンライン

（１）事務局説明

・ 中間取りまとめに示した施策の方針や方向性の実現に向けた課題として、①居心地がよく個性的な市街地・田園地域づくり、②官民連携によるまちづくりや社会課題解決の推進の２つを提示。
・ 中間とりまとめに関連する現状の施策について説明。

（２）委員の主な意見

・ 行政主体だと地域に主体性を持たせるのが難しい。公益性のある中間支援組織（シンクタンク機能）を作って、プロフェッショナルな人と一緒にまちづくりをやっていくことが大事。
・ 少ない人口で地域をどのように維持していくかが課題。Ｕターン者の働く環境づくりがまちづくりの担い手づくりにもなる。
・ かっこいい大人と知り合う機会、出会う機会をどんどんつくって、こんな大人になりたいというものを見せることが必要
・ 富山県はＵターン者が比較的多いので、これをどう誘導していくか。また、既存事業
・ （グリーンツーリズムとか都市農村交流）で、来県者の満足度をどう上げるかが課題
・ 今、まちの中では、見えたり聞こえてきたりするような文化が感じられない。誰かが決めたルールがまちの中にあまりにも普及していて、多様性とか個性が見えてこない状況にある。
・ いい人材を育てるとか、いい人材を呼ぶ一つの要素として文化レベルの向上があるが、そういうものに触れる機会だとか、まちに行ったときにかっこいい大人に出会う道筋がない。かつてはお金がなくても人はまちに来ていたが、今は買い物目的がないとまちに来ない。
・ デュッセルドルフでは、以前は工業や自動車が中心で人間や自然が効率的な箱の中に押し込められているという印象の町だったが、今は、自然や人間が町づくりの中心にあって、都市機能がむしろ見えづらくなっている。富山市のコンパクトシティの取組みや立山町のヘルジアン・ウッドもある意味、もともとの風景を生かした文化の在り方をつくられていると思っており、こういう景色をつくれたらいいのではないか。
・ ポートランドでは自分たちがまちづくりを変えないといけないという使命感が生まれて住民運動が起こったが、日本人はおとなしいのでやらない。そうするとボトムアップで人を動かすには、本人たちが楽しい思うことでないといけない。
・ 次世代のプレーヤー不足が一番の危惧。ストリートスマートでクリエイティブな子どもたちをつくるには、従来型の教育では難しく、その辺を改革する必要がある。
・ まちづくりに携わる者が一番意見を聞かないといけない人、若者や社会的弱者の声を聞いていない。それが聞けないからその地域の特色が出ない。

- 事業者が縦割りで、フランクなヨコの繋がり（産業間のつながり）がないから、イノベーションが起きない。小さい企業同士でもつながって新しいことをやることを県が支えるということができれば、成果は出る。
- そもそも地域のコミュニティが脆弱化し、住民同士のつながりや助け合いという基盤が揺らいできている。ここをなんとかしなければ、まちづくりどころではない。
- 新しい足がかりが欲しい企業はたくさんある。こういう課題が富山にある、こういうことをやっている人たちがいるということが明確になれば、民間は入りやすいし、住民の生活圏に企業が入ってきて、新しい官民連携につながる。
- 地域で企業とのつながりを「おせっかいする」組織とか、そういうものを生む仕組みを県でつくって、地域内でのコミュニティをどうポジティブに変換していくかというチャレンジをしてほしい。
- 特に市街地では、MaaSを通じたマルチモーダルのワンストップサービス化を進めるべき。例えば、県が展開するノーマイカーキャンペーンのチケットや、観光客向けのまちめぐりクーポンをMaaSアプリを通じてデジタル化するなど、地域のグルメや観光地のクーポンともセットになった県内交通のデジタルクーポン化に一つ一つ取り組んでいってはどうか。
- 田園地域では、デマンド交通で交通空白地域の足をいかに確保していくか、ニーズに応える形で市町村や地域の取組みを推進していくことが必要。自動運転など新技術の活用の推進が、交通空白地域における将来的なソリューションになっていくのではないか。
- 全国に先駆けて、市街地向け、田園地域向けMaaSに取り組むとよい。
- 公共交通を軸に、コンパクトで人が歩ける、目的が無くても人が集まるまちづくりを推進し、SDGsやゼロカーボンを絡めて、まちなかにEVカーシェアの展開、水素ステーションを拡充すればどうか。
- 城端・氷見線については、将来的な自動運転を考えれば、必ずしも従来型のLRTの手法にこだわらず、バスによるBRT(Bus rapid transit)を推進するなど、新しい交通体系、新しいモビリティに先駆けて取り組んだらどうか。
- 超法規的な空き家対策で中心市街地に特色ある多様な出店者を集めるなど、中心商店街活性化に柔軟に取り組んだらどうか。
- 行政と連携しながらイベントを開催しているが、みんながゲーム好きのカルチャーの中に行政の色を入れてしまうと、みんな離れていってしまうというか、ちょっと違うものになってしまったと感じることがある。
- ｅスポーツとか根暗だと言われることもあるが、こういうものを楽しむ場所であったり空気とかは、まちづくりや地域の中でしっかりと担保して、もっと明るい雰囲気が楽しめる場所もあったりとか、誰もが自分の好きなことを楽しめるような、そういう場所をつくっていく必要がある。
- まちにはいろんな方がいるので、それぞれのレイヤーとか属性に分けた取組みを地域の方たちと連携しながらつくっていくことが、まちづくりとしては大事。
- 家の中で映画や音楽等に手が届く時代となり、まちの中で体感する出来事があまりにも減っている中で、人と人のヨコのつながりの希薄化に危機感を感じる。どういう入

り口をつくり、誰にどう発信して、どう体感してもらって、富山に興味をもってもらうのか、現状は曖昧だと感じる。

- 面白い取り組みが発信されて遠くからわざわざ来る人が増えて、自然につながる方が持続可能性がある。政策的にやっても意味がない。本当にやりたいことのためにしか人は動かない。
- 地方では、地域のための活動は赤字になる。地域のためになることなら、赤字を皆でシェアする、皆でカネを出し合えるような文化が富山で生まれるとよい。資金面での支援も含め、踏み出すのを後押しするようなプラットフォームが必要ではないか。
- どんなまちにしたいか、分かり易いビジュアルとかスローガンがあった方が良い。レイヤーに分けてターゲットを絞り込み、富山が向かっているところを１点突破とは言わなくても、３点突破ぐらいにする方が分かり易く、皆で進めやすい。
- 富山市でマイクログリッドの実証をしている。最近こんな感じでやるとうまくいくのではないかと感じていて、大切なのは共感や関係資本。富山のために協力したい、富山と仕事ができる関係性を持ちたいと思う富山出身者は多いと思う。
- プロジェクトで行政が積極的に新しいことをやろうとしてもなかなか上手くいかない。うまくまとめるには共感という外圧が有効ではないか。
- エネルギーの地産地消は富の循環につながる取り組みであり、富山県でも展開していきたい。中山間地のオフグリッド・マイクログリッド化は民間レベルでは厳しく、県が先導プロジェクトを主導すべき。
- ブランディングWGでの意見でまちづくりに共通しているものとして、①富山は資源はあるけど魅力がない（海はあるけどビーチがない）、②外向けにプロモーショナルなことを言うより、中から熱が生まれないといけない、③どんどん民間に託してほしい、といったものがあった。
- 助け合い、共助とか、みんなでつくろうという話は、行政が率先し過ぎるより、民間が先導していくべき。行政はフィールド・空気をつくるところが大切。そのうえで、トライ・アンド・エラー（学び）ができることが大事。
- 生活者の立場に立つと、実証実験で生活が変わるのだから、実証実験に取り組む側も、やり切る責任があるという認識が大切で、やる気があるのかどうかの目利きも必要。ただ単に民間が来て、失敗しても、実験はいつでもオーケーという状況は、住民にとっては迷惑。
- 実証実験をするにしても、新しい取り組みをするにしても、共感や賛同でお金を集め、行政・民間・住民が一緒に共感性のあるものをつくり切って、そのうえで失敗も含めて学ぶというサイクルが富山発でできると良い。
- 民間と公共を分けるのが良くない。まずは個人ではないか。公務員もどこのまち出身とか建築が得意だとかの名刺をもって行動した方が良い。誰かが熱をもって取り組んだものが新しい事業になり、結果として公共サービスになると良い。
- 公共サービスを最初からつくろうとするから、最大公約数的になり難しくなる。富山は真面目なのでちゃんとし過ぎる。個から生まれたものを後から商品やサービスにすれば良い。個人の行動の集積がまちになっているだけだと考え方を変えたほうがよい。